

「大蔵流狂言秘本」のことばの性格

坂口, 至
九州大学大学院修士課程

<https://doi.org/10.15017/16283>

出版情報 : 文献探究. 5, pp.1-5, 1979-12-05. 文献探究の会
バージョン :
権利関係 :

「大蔵流狂言秘本」のことばの性格

坂口 至

昭和三四、五年に雑誌「国文学言語と文芸」(第二号、第一三号)に、篠田融、池田左司両氏の解説を付して翻刻された大蔵長太夫扣「大蔵流狂言秘本」のことばについて、この問題にしてみようと思う。

本書の筆者、大蔵長太夫について、まず簡単に取れておく。狂言辞典「事項編」によると、大蔵長太夫家は四代まで存続しており、一八世紀前半(享保頃)までその専蹟が知られると言う。初代の長太夫は、大蔵流宗家第一三世弥右衛門虎明(虎明本「わらんべ草」の著者)の三男で、生没年未詳であるが、江戸に在任し、四一歳で当地に没している。前記篠田、池田両氏は、ともにこの初代長太夫も「秘本」の筆者と推定しておられ、その書写時期を貞享以前とされている。

本書には、近世初期の新作とおぼしき九番の狂言(「嶋女」・「松尾寺」・「精進落」・「酒売」・「魚づくし」・「箱盗人」・「薬師如来」・「ちんば」・「小鳥好」)が収められている。その狂言台本としての性格について、やはり前記両氏の言葉を借りれば、

(1) 台本としての構成、プロットなど、各曲とも整ってはいない。
(2) 内容にかなり露骨な卑俗性が見られ、能狂言らしいさうかかえにくい。
(3) 数曲に見える歌謡に、近世初期童謡、民謡としての資料的価値が認められる。

ということである。本狂言本が夙く昭和三〇年代に翻刻されたから、その後これを正面から扱った論考を見たいのは、恐らく右に見るような資料的価値の低さによるものであろうと

思う。本書とそれ程隔たらない時代に筆録され、所収の曲数も八番と本書より少ないにもかかわらず、盛んに研究されている「虎清本」と好対照をなしているのである。しかし、ひとたび目を転じて、本狂言本所収の九番を言葉の面から見て行くならば、そこには他の狂言本には見られない幾つかの興味ある現象を見出すことが出来るように思う。以下、そのことについて述べてみたいと思ふ。

二

「大蔵流狂言秘本」の言語の特色として、第一に考へ得るのは、東国方言の混入の可能性である。

かつて大塚光信氏は、東国語脈の物指しとして(a)助動詞「ダ」の使用、(b)助動詞「ヨウ」の使用、(c)八行四段助動詞連用形促音便の三つを挙げられたことがあつた。本書には、(a)助動詞「ダ」は一例も見えず、すべて「ジヤ」で統一されている。 (b)は現われている。その他、音韻、語彙の面でも東国語の混入と疑われる現象がいくつかに出ているので、以下順次検討してみようと思ふ。

- (一) 助動詞ヨウ 本書の言語的特徴のうちで、最初に指摘るべきは、助動詞ヨウが完全に成立していることである。
- 見よう(「松尾寺」・「精進落」・「薬師如来」)
- 出来よう(「松尾寺」)
- 得よう(「薬師如来」)
- 申付けよう(「魚づくし」)
- 弘めよう(「薬師如来」)
- 住めよう(「薬師如来」)
- 進じよう(「薬師如来」)

来よう(「精進落」「箱盗人」)
右に見る如く、上一段、上二段、下二段、サ変、カ変、イ、ズレ
もが助動詞ヨウを分出している。これは、正統的な狂言台本
が、上一段の「イル」(居、射)のみ分出しているのと大い
に面目を異にしている。

中でも、カ変が既に「来よう」となっているのが注目され
る。周知の如く、カ変の場合は現代上方語においても未だ「
来う」の段階にとどまっているのであって、一般には「来よ
う」は東国方言の徴標とされていのである。本書の「来よ
う」は東国方言と見出す立場には、実は異論があるのだが、
後に見るように「秘本」には随所に東国語の混入と思われる
現象が出てくるので、この「来よう」も素直に東国語の反映
としたりたいと思う。

とすれば、本書の「来よう」は国語史上最初の明証と言
うことになる。それまでは一七世紀後半(明知頃)の洒落本
を待たねば現われぬものとされてきたのであるから、およ
そ一世紀近く溯れる訳である。なお、他の活用語の場合も、
例えは一七世紀中頃までに成立した洞門抄物において、上一
段、上二段は完全に、下二段、サ変は半ば以上ヨウが成立し
ている事実と照らし合わせても、「秘本」がそれより一
歩進んだ状態を示しているのは少しも不自然ではない。

(二) 八行四段助詞連用形促音便

「あらず思議や、アレに旅僧の茶煙畑に向かつて、回向の
するい。(「松尾寺」)

「へまてく、あらず、早や行て仕舞つた。(「精進落」)
「秘本」には右の如く、八行四段助詞の連用形を促音便にし
ている例が二例見える。その他はすべてウ音便で一五語二四
例を数える。

この促音便形をこのように考えるかは問題である。一般的
には、促音便形を東国方言と結び付ける傾向にある(「ロド
リダス大文典」など)が、上方系の文献でも漢文訓詁調の強
いものでは促音便の現われることもあるので、例えは洞門抄

物の促音便をも、その方向で理解しようとすることも可能で
ある。しかし、狂言の場合は洞門抄物などの文献とは言語位
相が本質的に異なっているのだから、そこに現われるのは
本来的に口語なのである。上方の言語を基礎にした正統的な
狂言がウ音便一本槍なのは、そういう事情に基いている。と
すれば、わが二例ではあるが、「秘本」に現われる促音便
形は当時の口頭語がたまに紛れ込んだものと考えてよさそ
うである(二例ともに、語リや誼いの場面をなく、ふううの
せりふに出ていることも好都合である)。

なお、八行四段助詞促音便ほどの指標とはならないまでも
、一応考えてみるべきものに、形容詞連用形の音便、非音便
の問題がある。本書では、原形九例、ウ音便形二九例となつ
ており、かなり原形の比率が高い。正統的な狂言台本では勿
論ウ音便専用である(語リ、誼いの部分は除く)。この現象
も、或いは八行四段助詞促音便の場合と同様の理由をもつて
東国語に結びつけることができるとはならないかと思う。

(三) 二段活用の一段化

「秘本」には、本来二段活用であるべき助詞助動詞が九例
見え、そのうち七例までが次の如く一段化している。

- 着せる(「嶋女」)・行かれる(「八尊」)・「松尾寺」
- 上げる(「精進落」)・飲める(「精進落」)・醒め
る(「魚づくし」)・生れる(「ちんば」)・行かれる
(「八尊」)・「ちんば」)

二段活用を保っているのは

「崇むれば(「薬師如来」)・見ゆる(「薬師如来」)
の二例しかない。周知の如く、正統的な狂言台本では二段活
用を保持している語の方が圧倒的に多いことを考えるとき、「
秘本」での一段化の率の高さは注意してよいと思われる。特
に、尊敬辞「ルル」が二例とも一段化しているのは、当時の
上方語の大勢として付属語の一段化が進んだという事実(4)に反
するもので、或いは東国語の反映ではなにかという疑いが持
たれる。

(四) 清濁

まず注目されるのが、「オビタタニイ」という語である。
へいれハハ、おびたジ、い事をム(おおー筆者注)

この語の第四音節は、現行狂言では諸流派ともに濁っているが、一八世紀の初め頃までは上方では確実に清音であった。「虎明本」や「天理本」は言うに及ばず、かなり近世的に崩れた形態を示す「狂言記」でも濁音に発音した形跡は全く無い。近松の浄瑠璃本でも清音表記がなされているという。従って、「秘本」の推定書写年代も信用する限り、この語の発音が東國的なものであつた可能性を否定することができなくなる訳である。もう一つ、

へいれハハに談合の有つて参つた。

へハテ談合とおしやるか。

へいれハハ、イトにもたもれ。(へいちゃんば)

とある。「談合」が問題となり得よう。この部分の文脈は、男が言つた「談合」ということばを子供が「団子」と聞き誤つたものである(三行目)。こゝで「一た子供」の耳を信用するとするならば、「談合」は「団子」でなくてはならず、「だんごう」でなければならぬ。この語もまた、「虎明本」「天理本」で「等」すべて清音表記がなされており、「オビタタニイ」と同じような疑いが持たれる。

その他は

へいれハハの女のあだかたきじやによつて、皆の衆をよほふ。
(へいちゃんば)

の「あだ(仇)」があるが、主要な狂言本がほとんど清んである中であつて、「天理本」の「伯母が酒」に一例濁つた例が見出されるので、当時の口頭語では既に濁音に発音される傾向にあるのかも知れない。

また、打消条件法の「ずは」に於いては、当時上方系の狂言では清音に「ずは」と発音されるのが普通であつた(「虎明本」「天理本」ではほとんど必ず「ずは」と発音記してもハ割

方清んでいる)が、「秘本」では四例の用例すべてが濁っている。但し、同じ打消条件法でも形容詞から続く場合では一例ではあるが、

へいれハハ、こらへてたも。(「精進落」)

と古相を保っている。

右の語例に見るように、「秘本」の清濁に關しては、惣じて他の狂言本に一步先んじていると言えよう。これが東國方言を反映しているものなのか、なお検討を要しようが、もしやうであるとするならば、他のいくつかの音韻現象と同じやうに、清濁において東國において近代化が早かつた可能性を認め得る訳である。

(五) 語彙

文獻の性格を語彙によつて明らめようとするのは中々に困難であるが、本書にも一、二問題となりやうな語が散見するので、簡単に触れておくことにする。

その一つは「てみくう」という語である。

へいれハハ、てみくう、おほなる斗りのふで見よう。

(「精進落」)

時代はやや下るが、越谷吾山の「物類称呼」(安永四年)に「大いなる事を五畿内近国共に、おほいといひ、又、いかいと云、(ハ中略)安房上総及遠江信濃越後にて、てみくう」といふ記述があるから、少なくとも一八世紀後半には「てみくう」という語は東國方言と意識されていたらしい。こゝろが、この語は既に夙く安原貞室の「かた言」に「物のいかめしくおほきなることを、てみくう、てみくう、いづくいづくといふ」といふと、いとさもしろ聞中」と出ており、一七世紀頃には上方でもよく卑俗な言葉として使用されていたことがわかる。従つて、「秘本」の「てみくう」という語を、当時の東國方言と決めてかかることはできぬことになる。しかし、他の狂言諸本が「大いなる事」の意味では専ら「てみくう」といふ語を使用していること(本書にも随所に見える)をも考へ合わせるに、「秘本」に「てみくう」が使用さ

れているのは、やはりこの語の方が東国の人々に理解され易か、だからとも考えることが出来るように思う。

「でこう」という語と似た性格の語に、自称代名詞の「おいら」がある。

「おいら」の内、着ハ、うぐるニツに鯉ニツ、(「酒虎」)の言葉もまた、「物類称呼」の自称語の条に、「東国にてはおいらとも云れとあるが、ほぼ同じ頃成立した谷川士清編「和訓栞」には「おいら 大坂言葉也」とあつて、東国上方共に使用されていた語と見られ、地域比定の決め手とはならない。そのほかにも二、三問題になるような語があるが、今は省略することとする。

(注) (1)「おいら」とある種の抄物(国文学政21、昭三四七)
(2)大塚光信「助動詞マウに於て」(国語国文引4、昭三三)

(3)外山映次「洞門抄物に見える助動詞マウに於て」(国語学報、昭三六九)

(4)奥村先生「所謂二段活用的一段化に於て」(近代語研究弟二集)

(5)亀井孝「狂言のこぼし」(能楽全書「第五巻」)

(6)野口義廣「清濁資料としての近松世語物事瑣瑣」(語学研究44、昭五三)

(7)「5」論文に同じ。

三

「大蔵流狂言秘本」の第二の言語的特徴として、「類推言語」とも言うべき、一種の創造語をいくつか指摘できるのではないかとと思う。

その一つは、所謂連声をめぐる問題である。まず、いくつが例を挙げてみる。

「近よ寄よふて、酌の仕合ふてのもう。(「精進落」)

「一家の人を呼び寄せ、振舞のいたやうと存る。(「魚づくし」)

「アレに旅僧の茶種畑に向かつて、回向のするハ。(「松尾寺」)

右の傍線部分の「の」は、通常の語法では「を」とあるべきところである。このやうな、いわゆる「を」に通う「の

」の類例を国語史上に求めることは、さほど困難ではない。はやくは、「今昔物語」にかりまじまつて出てゐる「抄物」も、

「伊尼ノ春秋ノ作ルハ(「史記抄」)

。至元十三年二天下ノ取テヨリ(「三休詩絶句抄」)

「の」の例を拾ふことが出来る。近くは、「平松家本平家物語」や、「天草本伊曾保物語」にも出てゐる。ところが高松政雄氏によつて指摘された。

「秘本」における用例も、これらの延長線上に位置するものと考えることが出来るかもしれない。しかし、近世に入つてこのやうにまつた形で出る文献を他に知らぬし、

「秘本」には「の」を通う「の」で平行して、一層

奇異に見える次のやうな語法が現われてゐるのである。

「目録」(「伊見」)「まじまじ」(「魚づくし」)

「言葉」(「下されい」)「(「薬師如来」)

「代筆」(「いたやう」)「(「葉師如来」)

これらの「の」は、普通であれば「は」または「を」とあるべきところである。最後の例は表記無しでも意味は通じる。

このやうな「の」は「または」に通う「の」といふ語法の他の例は、未だ管見に入らない。

この奇妙な語法は、このやうに解釈すればよいのだろうか。筆者は、次に述べるサ行イ音便の現象を考へ合わせて、次のやうに考へてみたいと思ふ。

即ち、「秘本」の筆者大蔵長太夫は、撥音の下に來た場合に

の「の」連声が起るという原則を十分理解してゐたか、ために、撥音以外の音の時にまで、他の伝承されて來た狂言で

昔段聞き慣れてゐた「の」ノ「の」ナレといふ語法を推し

広めてしまつたのだと、このやうに考へれば、右の奇妙な語

法も一応納得されるであらう。

サ行イ音便の場合、例えは次のやうである。

「當年ハ四方の波も靜にて五穀も成就の年柄で、大麥小麦

もよく出来まいて。(「嶋女」)

ハ中々、やせ申した。酒もやうしてたもれ。ハ「精進落こ」周知の如く、サ行四段動詞のイ音便化に關しては一定の條件があつて、特に中世以降では敬語や長音節を含む語の場合にはイ音便を起さず、ハの原則となつてゐるのである。右に見る「ますしや」申す「かまき」にそれで、他の文献には全く現われぬ。この現象も、前の連声の場合と同じやうに類推のなせるやぶと見るより、解釈の「さうか」の「さ」の「は」の「か」と思ふ。

(注) (1)湯沢幸吉郎「室町時代言語の研究」三五頁。
(2)「平松本平家物語の一面」(國語國文)三七、昭四二

以上、「大藏流狂言秘本」の言語について、二つの観点から考へてみた。結論として、

(1)東国方言に對して大はばに譲歩してゐる
(2)秘本独自の語法を創造してゐる

の二点を得たが、最後にこの「秘本」の「さ」が狂言の言語を考察する上で、どのような意味を持ち得るか一言して小稿を終えようと思ふ。

第一に、前記の結論(1)に關して、この「秘本」の言語の方言色は、他の正統の狂言にはほとんど見られぬ特徴である。その「さ」は、僅かに「ニ」の狂言(「雁盗人」など)において地方の「なまり」(「坂東なまり」)が出るにやま、ま、つてゐるのであつて、本質的に上方語専用なのである。これには、やはり大藏長太夫の江戸在住の事實が關係してゐると見られる。長太夫がいつ頃から当地に住んだかは明らかでないが、江戸の「さ」とは、近しいものであつたことは確かであらう。

結論(2)は、舞台用語としての狂言の「さ」とは、歴史的に「さ」の「さ」の興味深いものがある。狂言の「さ」とは、歴史的に眺めれば、それは結局伝承されて来た言語と当代語との間の確執に外ならず、そので選ばれる言語は、いふれ實際に存在して言語なのである。「さ」の「さ」の言語には、

て存在してゐたので、さかかたと考へられる語法が混じつてゐる。

右の二点は、結局「新作狂言の言語」という問題として一般化できるのであらう。これについては未だ十分調べてゐないので結論は先の「さ」としておくが、例えは「狂言三自者集」(富山房百料文庫)所収の大藏ハ右衛門派の新作狂言とおぼしき二〇番程を見ても、敬語辭において若干近世的色彩が目立つ程度で、その他の言語面では、他の旧作のものにえらぶとさうでもない。その点で、「秘本」の言語はやはり独自の位置を占めるのである。

——九州大学大学院修士課程——